

文部科学省委託「外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修モデルプログラム開発事業」
モデルプログラム（2017年度版）を活用した授業・研修事例
支援員の養成・研修 No.2

①高校進学を目指す子どもたちへの指導 ②外国籍生徒に対する教育相談

検証実施機関（団体）：NPO 法人可児市国際交流協会 高校進学支援 さつき・かがやき教室、
 岐阜県立加茂高等学校校定時制 合同指導者研修会
 可児市国際交流協会・加茂高等学校校定時制 事務局次長・教諭 近藤 利恵、高瀬 聡子

1 検証対象の研修・授業について（該当するものにチェックを入れてください。）

養成／研修	<input type="checkbox"/> 養成 <input checked="" type="checkbox"/> 研修
タイプ	<input type="checkbox"/> 基礎教育 <input type="checkbox"/> 専門教育 <input checked="" type="checkbox"/> 支援員教育
研修・授業日（期間）	①2018年8月6日 ②2018年12月22日
総時間数	4時間45分（①2時間45分×1回 ②2時間×1回）
研修・授業科目名	①高校進学を目指す子どもたちへの指導 ②外国籍生徒に対する教育相談
受講者 ①8月6日	人数（19名）（+関係者3名） 年齢層：20代（6名）、30～40代（8名）、50～60代（5名） 計19名 外国人児童生徒等教育の経験：あり（16名）、なし（3名） 日本語指導（成人対象を含む）の経験：同上
受講者 ②12月22日	人数（15名）（+関係者2名、通訳1名） 年齢層：20代（7名）、30～40代（6名）、50～60代（2名） 計15名 外国人児童生徒等教育の経験：あり（11名）、なし（4名） 日本語指導（成人対象を含む）の経験：同上

2 地域及び学校現場の外国人児童生徒等の受け入れの状況

(1) 当該自治体における外国人児童生徒等の数・分布とその民族背景

可児市内公立小中学校に在籍する外国人児童生徒数は、2001年頃から急増し、2018年には、637人（11月1日現在）で、全児童生徒数（8,265人）の7.7%になっている。2008年秋の経済危機以降、一時減少に転じたが、2011年からは特にフィリピンが年々増加している。国籍別でフィリピンが336人と最も多く、外国人児童生徒の52.7%を占め、次いでブラジルが274人、43.0%になっている。

(2) 当該自治体における外国人児童生徒等の受け入れ・指導体制

【可児市国際交流協会】

可児市では、公立小中学校に就学する外国人児童生徒を対象とした学校教育で必要な生活指導や初期的な日本語指導を一定期間集中的に行う「ばら教室 KANI」があり、2005年4月の開設以来611人（2018年4月現在）の児童生徒が修了している。（2017年4月44人、2018年4月100人）

ばら教室修了後は、在籍校で、必要に応じて、校内に設置された国際教室で、中・上級の日本語指導や在籍学年に応じた教科学習支援を受けることが出来る。

学齢超過の生徒については、可児市国際交流協会が受け入れ（2018年12月現在可児市17名、美濃加茂市5名）、当年度の受験に向けて、日本語及び教科学習支援を行っている。また、可児市、可児市教育委員会、市内小中学校国際教室、ばら教室 KANI、可児市国際交流協会から構成される外国人児童生徒の教育に関わる担当者会議を

定期的に開催している。

【加茂高等学校】

記録を辿ると、2000年に外国籍生徒の氏名はあるものの40人中、数名しか外国籍生徒は在籍せず、卒業に至る生徒はごく少数であった。7、8年前からブラジル人在籍者が増えたことで、ポルトガル語の適応指導員の配置の配慮等が実施され、分割授業による少人数指導や母語支援が可能となり、休学者や退学者が徐々に減り、卒業を果たす外国籍生徒が増加した。4年前よりフィリピン国籍の在校生も増え、タガログ語適応指導員が配置された。7年前よりキャリア教育アドバイザーの配置を受けていたが、3年前より所在する美濃加茂市や周辺の自治体、ハローワークと連携した進路行事の開催など外国籍生徒の「正社員雇用」を働きかける取り組みを強化している。

(3) 外国人児童生徒等教育に関わる教員（一般教員を含む）、支援員の教育力の課題

【可児市国際交流協会】

当協会は、様々な教室を運営しているが、全ての教室において、資格は問わず、日本語教育や教科学習指導に関心や熱意のある方々を指導者（支援員）として受け入れている。確固たる教室の方針はありながら、対象の生徒が多様なため、指導法や教材は確立しにくい。しかし、それを求める支援員が多く、決まりに倣って指導することを好む傾向にある。生徒に向ける視点を、教材を用いた学力の結果だけではなく、生徒が持ち合わせる様々な背景にも向け、支援員自身で因果関係を見出し、様々な取り組みを織り込んでいく必要がある。当協会では、年に2回、日本語支援者養成講座（含む研修）を実施しているが、そうした方々の指導法を探す糸口や見直すきっかけになればと思うが、参加されないという矛盾が生じている。

【加茂高等学校】

- ・外国籍生徒数の増加、外国籍生徒の国籍別割合の急激な変動の中で、経済的な不安定さからくる家庭不安、個々が抱えるメンタル的な問題、日本文化への適応困難などをどのように指導するか。
- ・心理的に不安定な外国籍生徒をどのように支援、指導していくか。

3 研修・授業の成果について

【8月6日：可児市国際交流協会】

(1) (受講者アンケートより)

①受講者の研修への期待（アンケートのIより）

日頃、指導者が支援している中で、感じる現場の指導の困難さ、課題について、一旦洗い出し、今後の指導にどう生かされるようになるのかを、講師を招いて一緒に考える。また、加茂高等学校定時制の教員の方々には、高校入学前の生徒たちが、さつき・かがやき教室で、どのような指導を受け、どんな学習をしているのかをご覧いただき、入学後の対応に役立てていただく。ということを周知の上、立場別に以下の回答があった。

〔教室コーディネーター〕

- ・どんな人でも取り入れやすい、取り入れたいと思う指導法、授業づくりのヒントが学びたい。
- ・(中学卒業程度認定試験について)教室で出来得る、より効果的な指導法を学びたい。
- ・精神面、生活面、保護者との関係がアンバランスな生徒にどう関わったらよいのかを学びたい。
- ・指導者側に偏っている能動的な働きかけを受け身になっている生徒の自発性に変えられ

ないかを考えたい。授業のシステム、教室のあり方など根本的な部分でのアドバイスも聞きたい。

〔指導者(支援者)〕

- ・理解度に多少ばらつきがあるクラスで、どのように授業を進めたらよいか。
- ・知的好奇心を満たすような授業をどのように組み立てればよいか。
- ・日本語を話すことに自信がない生徒への発話促進方法。
- ・効果的な日本語・教科指導について学びたい。
- ・今現在の自身の指導法でよいのかどうか。

〔加茂高等学校定時制の教員の方々〕

- ・入学前にどのような指導を受けてきたか、実態を知ること。
- ・入学前にどのような目的を持って、本校へ入学しているのか。
- ・具体的に言語的な指導・サポート、生徒指導、効果的な指導方法。
- ・集団での話の聞かせ方。
- ・学習自体へのモチベーションの上げ方。
- ・学校、保健室、スクールカウンセラーへの文化・価値観の違い。
- ・日常会話のやり取りを理解していくのに、どのような過程をたどっているのか。

②受講者の研修内容の理解度・満足度（アンケートのⅢ①より）

期待していたことと実際の研修内容は、「ほぼ一致」が29%、「だいたい一致」が53%と理解度や満足度が高いことが分かった。しかし、「あまり一致していなかった」が18%あり、該当者は60歳以上と特徴的であった。講師からの問いかけや揺さぶりに応え、実践で試してみようとする人と、具体的な説明を求める人と満足度が分かれたようだ。

③関心を高め、教育力の向上を促したと考えられる内容・活動（受講者アンケートⅢ②の回答より）

さつき・かがやき教室の授業を加茂高等学校定時制の教員の方々に見ていただくことで、高校が行っている分割授業よりも、さつき・かがやき教室は、さらに小規模で授業を実施し、少人数であるため丁寧に個別対応が可能となる反面、高校へ入学後、いきなり集団指導で一度で理解することが困難になる状況を解決するために、高校でも集団指導の前後に個別指導をして、フォローしていけるような内容及び体制作りの必要性を挙げる受講者もいた。講義については、講師が投げかけたいろいろな言葉や問いかけが受講者にとって、改めて教室を見直し、考えるきっかけとなった。教えるのではなく、自発的に学ばせるという勉強の戦略や教材に捉われないで、生徒の考え方を大事にするという講師の言葉が心に残り、自分たちの指導すべきポイントを再確認でき、早速、授業作りに反映させたいという意見があった。

グループディスカッションについては、加茂高等学校定時制の教員の方々の授業に対する本音や考え方が聞けたり、さつき・かがやき教室の生徒たちが、高校入学後の様子や、どのように授業を受けているのかなどを聞けたり、高校現場の生の声を聞くことで、何を大切にしなければならないのか、再確認できた。グループディスカッションでの意見は、貴重であり、今後も指導者間で話す機会が定期的にあるとよい。など、関心の高さが分かった。

④受講者が今後に見る研修・授業の内容と活動（受講者アンケートⅣより）

多岐にわたる要望が見受けられた。

- ・本国のカリキュラムについて
(生徒が学年相応の学力をもっていない傾向にあるため)

- ・中学卒業程度認定試験対策について
(当協会では、日本の高校受験資格を有しない(本国で9年以上の修了がない 又は、日本での中学の卒業証書がない)生徒に、日本語、教科学習支援を行っているため)
- ・EDTECH などパソコンを利用した効果的な授業について
- ・自分たちの問題点を深く研修するために、内容や時間を長くしてほしい。
- ・外国籍生徒が抱える問題の1つに経済状況があるが、教育・健康を支えるためにどのようなサービスがあるのかを知りたい。
- ・高校または日本語教育を受けた後の生徒たちの生活について。どのように働き、どのような家庭を築いていくのかを知りたい。

【12月22日:加茂高等学校定時制】

(1) (受講者アンケートより)

①受講者の研修への期待 (アンケートのⅠより)

今回は心理カウンセラーを講師として迎え、外国籍児童生徒たちの「心理面」に関わる研修を行うということを周知していたこともあり、受講者の研修への期待もそこに関わるものとなったが、視点は様々であった。主な視点は以下のとおりである。

- ・友情関係に関する問題
(同一国籍でなく、互いに言語運用能力が乏しい生徒たちは、どのように友人関係を築いていくことができるか。)
- ・保護者に関する問題
(保護者と連絡が取れないケースがあるが、学校と家庭が足並みをそろえて生徒を育てていくためにはどうするべきか。我々の価値観が外国籍児童生徒の保護者とはズレているように感じるが実際どうであるのか。)
- ・生徒自身に関する問題
(授業規律の確立方法。遅刻や欠席といったルールの指導方法。外国籍児童生徒たちが陥りやすい心理状態や心理的問題。問題や困難を抱えている生徒へのアプローチ方法。)

②受講者の研修内容の理解度・満足度 (アンケートのⅢ①より)

- ・期待していたことと実際の研修内容は「ほぼ一致」が20%、「だいたい一致」が80%となっており、研修内容の理解度は高いことがうかがえる。
- ・受講者のアンケートより各項目内容について「5非常に」「4参考になった」を選択した受講者は6項目中5項目において7割を超えており、受講者の満足度は高いと言える。
とくに、今回、外国籍生徒に対するカウンセリングを専門としている April 先生を講師として招いたことで初めて可能となった「外国籍生徒の心理状態の特徴や彼らが抱きやすい問題点」の講義、「直面している問題に対する講師からの指導・助言」は90%を超え、受講者にとって非常に有意義な研修内容であったことがうかがえる。

③関心を高め、教育力の向上を促したと考えられる内容・活動 (受講者アンケートⅢ②の回答より)

- ・全受講者が「先生の講義」を回答として挙げており、上記したように非常に満足度の高い講義であった。
- ・「フィリピンという国の国民性や、家族への考え方」「フィリピンタイム」「ビザという制度が与える影響」「不安定な家庭環境」「自尊心の低下」といったことを講義の中で学んだことで、受講者たちが、普段の指導の中で疑問を抱いていた点が徐々に明らかとなってきたと言える。また、

そのような価値観のズレを、どのように指導していくのが適切であるかと、具体的な指導方法や指導の際の配慮すべき点等を指導いただけたことも、受講者の関心を高めた要因であると考える。

④受講者が今後望む研修・授業の内容と活動（受講者アンケートⅣより）

受講者が今後望む研修の内容は以下の通りである。今回、外国籍生徒の心理に関する研修を受講したことで、さらに具体的な事例に基づいた支援方法を学びたいという受講者が複数名見られた。また、他の内容に関する研修を望む受講者も見られた。内容は以下の通りである。

- ・外国籍生徒の心理的な特徴・外国籍生徒の心理的な支援方法・事例に基づいた対応策
- ・家族との接し方・多文化共生について・教科の内容の教授方法・日本語力向上の方法
- ・学習へのモチベーションの上げ方・CLIL教育について

(2) 研修企画の立場から見た、研修の成果と課題（企画者アンケートⅢの回答より）

【可児市国際交流協会】

年代別に評価が分かれた。20～40代の指導者（支援員）は、グループディスカッションが有用であった。講師からのいくつかのティップスが有用であったという回答は、講師と一緒に考えた研修の「狙い」が良い結果につながった。

60代の指導者（支援員）は、グループディスカッションも含めて、時間が短くまとまらないことや具体的説明を求める意見が多く、指導経験があり、強固なビリーフを持っている人たちに對して、どのような研修内容が適切か再考しなければならない。

今回、事前に教室コーディネーターが教室の困難や課題を挙げ、それに関わるどんな研修を受けたいかモデルプログラム内容より、選んでもらったものを併せて、講師にお渡し、研修内容に役立てていただいた。従って、研修終了後は、その教室コーディネーターと講師が振り返りを行い、今後の授業運営に對応できるよう、さらに講師から助言や激励をいただき、自信や気付きへとつなげられたことはとても良いと感じた。

【加茂高等学校定時制】

・研修の成果

受講者の満足度が非常に高い研修であったことが成果と言える。受講者のコメントや反応を見ても明確であったが、フィリピン出身の児童生徒に対して、今まで「なぜ？」と疑問を抱いていたこと、あるいは「そのような性格である」と思い込んでいた部分などが、文化的背景に起因していると分かったことが大きな収穫であったように感じる。

また、フィリピンの児童生徒たちが抱えている家族の問題等も分かり、今後の指導に生かすことができる講義であった。

事前に、本団体が感じている問題点や悩み、現状を講師に伝えておいたことで、より現状に即した講義となったと分析する。受講者たちの関心が高い内容であったことも影響し、高い満足度を得られたのではないだろうか。

・研修の課題

今回の研修は時間的な余裕がなく、質疑応答の時間が十分に確保できなかったため、具体的な事例に對しての回答は少しか得られなかった。講師による回答が得られた受講者は、大変満足したと評価しており、他の受講者には、もう少し時間が欲しかったとコメントしているため、この活動の時間が十分に確保できると、さらに満足度が高い研修になったの

ではないかと感じた。

4. モデルプログラムについて

(1) 養成・研修内容構成（報告書 pp. 72-76）について（意見）

- ・追加が必要な項目はないか。
- ・項目の構成（配置・カテゴリー化）は適当か
- ・項目の数や具体性は適当か。

- ・項目は多岐にわたっており、様々な視点から研修内容が構成されていたため妥当である。
- ・内容構成(案)が作成されてはいるが、想定されている受講者の立場や状況、理解度、またそれらの段階を踏まえた、活動の設定方法がより明確に示されていると、企画が行いやすいのではないか。

（例：○○のレベルまで学んでいるので次は△△の研修。

××の状況に応じた研修が求められているので□□の研修。 など、
系統立てて組み立てられていると、研修内容の焦点化が図りやすいのではないか）

(2) モデルプログラム（報告書 pp. 207-244）について（意見）

- ・90分程度のモチーフ型のプログラムは、選択・組み合わせがしやすかったか。
- ・モデルプログラムは実施カリキュラム作成時に、参考になったか。
- ・講義・活動・フィールドのバリエーションは、活動を考える上で役立ったか。

- ・具体的な活動例が掲載されていることで研修計画のイメージが抱きやすくなり、カリキュラム作成の参考となった。
- ・講義、活動、フィールドのバリエーションが豊富であったことは、活動を考える上で役立った。
- ・90分1コマの研修を作成する場合は、このモデルプログラムでも十分参考になると言えるが、長期的視点を見据えて複数回にわたる研修や授業を企画する際に、系統立てたカリキュラム例や組み合わせ例があると、より充実した研修が可能になるのではないか。
- ・この研修に至った課題が明記されていると、さらに参考にしやすい。

(3) モデルプログラムの活用で研修の運営が円滑になったか。

- ・現場の課題と研修内容を関連付け、受講者に目的を伝えやすくなったか。
- ・企画者と講師間で研修運営についての考えを共有しやすくなったか。
- ・複数回の研修の場合には、各回の関連付けがしやすくなったか。

- ・モデルプログラム例が作成されていること、各領域や内容に応じた項目例が設定されていることにより、研修を企画する側としては参考例があるため活用しやすかった。
- ・各領域について、専門講師としてふさわしい人物が分かると研修の企画も行いやすいと感じた。各地域レベルで、人材バンクの様なものがあり、自分たちが必要としている領域や観点で講師としてご教授いただける先生がすぐに分かると、研修の計画や運営もスムーズになっていくと考えられる。実情に応じた、より充実した研修も行えると考えます。
- ・講師が日本人であるという前提でモデルプログラムが作成されてはいたが、今回、本団体が行ったように、外国人の方が講師になられたときに参照できるよう、英語版のモデルプロ

グラムがあると良いと感じた。(通訳の対応などの想定もしておくとなスムーズになるのではないかと思われる。)

(4) モデルプログラムの活用を通して、研修・養成で、どのような力を高めてほしいか。あるいは、高めるためには、どのような活用の仕方が必要だと思うか。

- ・養成段階では、外国籍児童生徒に関わる基礎知識を高める必要があると考える。我々の団体は、目の前に外国籍児童生徒がおり、日々、いかに彼らの教育を行うか奮闘している立場にある。そのため、今回のような具体的な講義や事例を基とした質疑応答の講義が有効であった。その一方で、外国籍児童生徒の実態がイメージしにくい養成段階の受講者に対しては、机上の空論になることも懸念されるが、基本的事項を学ぶことがまず求められるのではないかと思われる。つぎに、概論の先を見通した研修も必要であると考え。まずは基本的事項を抑えることが喫緊の課題であるが、これから採用される方々は「即戦力」であることが求められるのも事実である。これに対応するために、在学中から現場教員の体験に触れたり、実習形式で現場を体験したりと、現場をイメージできるような取り組みも養成課程の中で計画していただくとよいのではないかと思う。
- ・研修段階においては各個人や団体の実情に応じた活用が必要であると考え。研修の段階では、外国籍児童生徒の指導を行う中で、行いたい研修の方向性が明確となっていると考えられる。従って、各問題や悩みといった実情に応じた活用が必要であると言える。